第８回　庭野平和財団ＧＮＨシンポジウム

公益財団法人庭野平和財団は、平成28年11月９日、東京・中野区の中野サンプラザで第８回ＧＮＨ（国民総幸福量）シンポジウムを開催しました。以下に、基調発題とパネルディスカッションの要旨をまとめました。

基調発題　「地域活性化」の意味を問いなおす～いま何が問われているのか～

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　哲学者　　内山　節

「地域活性化」と言った場合、この20～30年の間で、いま最も活力があるのではないかと私は思っています。統計上の数字では、確かに地域の衰退は進んでいるように思われますが、私の知る限り、日本全国のどの地域でも自分たちの生きる世界を自分たちでつくり直すという活動が活発になってきているように思います。

これまで全国のほとんどの地域は、日本の経済が発展しさえすれば地域も活性化する、という発想で地域のことを考えていたと思います。しかし、いまは経済が発展するかどうかということではなく、自分たちの生きる世界はもっと別のものではないか、という発想で行動する人たちが多くなってきています。

その動きの一つとして、Iターンというものがあります。私が１年の半分ほどを過ごしている群馬県の上野村でもIターンの形で移住してきた人たちが多く、村の人口の約20パーセントは村の外から移住してきた人たちで占められています。そうした新しい移住者と、元からいた住民が連携しながら新しい地域づくりを進めています。

いま経済発展の話をしましたが、よく考えてみると、実は地域も日本経済の発展とともに歩んできたのですね。電気製品や車は都市部にだけあって農村部にはないのかというと、そんなことはなく、むしろ冷蔵庫などは都市部の家庭より大きなものがあったり、車にしても都市部では車を持たない人のほうが多いのに、農村部では一軒に３台ぐらいあったりすることが珍しくありません。ですから、農村部も日本経済発展の恩恵を受けてきたわけです。

　しかし、ここで考えなければならないのは、経済が発展した結果、地域は力をつけたのかどうか、ということです。実際に起きたことは、経済的に恵まれた結果、地域が衰退してしまったということです。もちろん、経済発展そのものはあっても構わないわけですが、経済発展そのものが目的ではなかったはずだ、ということに気がつき、自分たちの生きる世界はもっと別のものであるはずだ、と思い始めた人たちが増えてきている。そういう意味で、ここ20～30年の間を見ると、地域に最も力がつき始めた時代といえるのではないかと思います。

近代と近代以前の社会を比べたとき、そこには、いろいろな意味での違いがあります。人間たちが生きる世界は、経済や労働、そして家族や文化や信仰といった、さまざまな要素の組み合わせによって成り立っていますが、近代以前の社会では、それらの要素はどこかでつながり合っていた、といえると思います。

たとえば、私の住んでいる上野村には山の神信仰というものがあります。それは、直接的には、山の神さまが森を守ってくれている、と考える伝統的な信仰ですが、その山の神はまた自分たちの社会を守ってくれているものでもあるわけです。村の人たちは山からマキという形でエネルギー源をもらって生きている。それは村の人たちの生活そのものであり、そういう意味で、山の神信仰と、村の経済や、エネルギー、労働といったものが互いに密接につながり合っているわけです。また、山の神を中心とした、お祭りもあります。そういう意味で、人間たちが生きる世界のいろいろな要素が、全部、結び合っていた。それが近代以前の社会だったといえると思います。

ところが、近代社会ができると、それらの要素は、全部、バラバラになってしまいました。経済は経済、暮らしは暮らし、文化は文化、信仰は信仰。つまり、近代という世界は、人間たちの生きる世界のいろいろな要素をバラバラにし、分断してしまった時代と考えることができます。

しかも、これらの要素の中で経済という要素だけが妙に力をつけてしまい、ついには経済だけが暴走するようになってしまった。そして、経済の暴走は、ほかのいろいろな要素を壊してしまうという事態さえ惹き起こしてしまいました。特に都市部で、人間らしい暮らしを失ったような人さえ生まれてしまった。それが近代社会の特徴的な形といっていいと思います。そして、それは日本だけでなく、経済が発展した国では、どこでも同じような現象を起こしているといってもいいでしょう。

いまの地域での動きというのは、そのバラバラに分断された、さまざまな要素を、一体化、あるいは再統一していこうとする動きであるといっていいと思います。しかも、それは決して画一的な動きでなく、その地域、地域の特徴に合った動きになっています。たとえば、上野村では山村部の特徴をもった動きになっていますし、漁村部では、漁村としての特徴に見合った動きになっているはずです。そういう動きが日本全国で広がっています。

こうした動きを一種の社会変革とすると、それは、一見、前向きのように思えますが、実は、社会を変えようとしている人たちの共通の方向性は、むしろ「伝統回帰」といっていいと思います。伝統回帰といっても、時代も社会状況も昔とは違いますから、そっくり昔に戻ろうというのではありません。自分たちの生きる世界でバラバラに分断された、その要素を、もう一度、一体化する。それが伝統回帰であるわけです。

では、上野村では何をやっているのか。上野村は村の面積の95パーセント以上が森林です。そして、田んぼが全くありません。昔は養蚕が盛んでしたが、いまは中国産の生糸が安く価格的に対抗できないので養蚕は廃れてしまいました。そこで、現在、村としては森を上手に使って生きていく工夫をしようとしています。

森林をいい状態で保とうとすれば、間伐など、ある程度、森の手入れをしなければなりませんが、その手入れの過程で出てきた木材は森林組合の工場に運んで製材します。それは主に杉や檜の建築用材になるわけですが、もう一つ、広葉樹の場合は木工用に製材しています。木工製品としては、小さなものでは茶托のようなものから、大きなものとしては家具まで、ほとんどの木工品を作ることができます。

また、製材の過程では、建築用にも木工用にも使えない部分が出てきます。それらはペレット工場に運んで木質ペレットとして生産します。そのペレットは、農業施設などの加熱用ボイラーの燃料にしたり、各家庭の冬の暖房用燃料にしたり、さらには余った部分を村の発電用に回すという形をとっています。

そういう形で森を利用することによって、建築用材、木工品、燃料などを生産し、エネルギー源としても活用することによって、村の中で新たな雇用や労働を生み出し、森を中心とした生活の一体化が図られているわけです。上野村は、また、小さいながら観光地でもあって、昔ながらの伝統的な暮らしそのものが観光資源にもなっています。

村の外からやってきた人は、「山奥の村なのに新しいことをやっているんですね」とよく言いますが、私はそれに対して、「いえ、これは伝統回帰なのです」と答えています。森をエネルギー源として暮らしのさまざまな要素が一体化していた、かつての伝統的な形に戻る、という意味で伝統回帰なのです。

ですから、それは単に上野村の経済をどう発展させるか、ということではないのですね。上野村が持続するために、どういう労働のあり方がいいのかを優先的に考える。つまり、村の持続のための労働体系を考える、ということです。

それを一つの基盤として、村の道路などの維持管理においても、あるいは日常生活においても、村人同士の助け合いを大事にしながら、お祭りや信仰など村の文化を守っていく。こういうことが一体化した形で、しっかりとできる村は、持続できる村になるわけです。ですから、初めに経済ありき、ではなく、村を守っていくための労働ありき、ということです。

地域の活性化ということを考える場合、この上野村の例は一つの事例ですが、全国的に考えると、見ている方向性は、どの地域でも、この方向性に近いといえると思います。上野村のような農山村だけでなく、地方の小都市などでも、結構、若い人が移住して、ソーシャル・ビジネスなどを起業したり、さまざまな形で、村おこし、町おこしに取り組んでいます。

それは、冒頭に申し上げたとおり、自分の生きる世界を、もう一度、つくり直したい、そのためには、人間が生きるうえで、いろいろな要素がつながり合い、一体化しているような世界を取り戻したい、という方向性において共通していると思います。そうした動きが、いま日本中で進んでいるということを申し上げて、本日の私の問題提起とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。